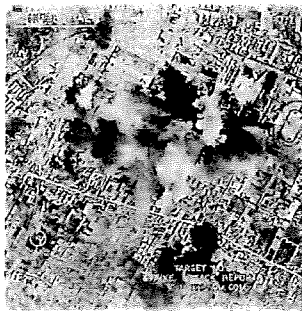


息子に召集令状 苦悩

文人の 武蔵野

1941年12月8日、「大東亜戦争」の開戦をラジオが知らせたとき、金子光晴は「馬鹿野郎だ！」と叫んだそうです。光晴自身は「戦争が不利だ」という見通しをつけたからではなく、まだ、当分の戦争がつづくといううつろいしさからであった」とそのときの心情を自伝で綴っています。

金子光晴 ⑧



1945年4月に武蔵野の軍需工場が空襲を受けた画像。米軍撮影（米国立公文書館所蔵、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館提供）

す。光晴の一家が吉祥寺に移り任んで数年後のことでした。前年に刊行した「マレー蘭

印紀行」の反響も、光晴には想定外でした。現地でも植民地主義の「悪」を見聞した経験に基づき紀行文でしたので、同時代の類書とは異なり、軍国主義的な視点は皆無でした。当時の読者はそこに失望したそうです。

日本人の姿貌（すがた）よりも、光晴を驚かせたようでした。10年近く海外を放浪し、日本を離れていた彼には、「例え、表面のことだとしても、昭和七、八年頃までの日本人のなかには」、「世界共通な人間的正義感を表にかざし、自由解放を口にしていた」自称インテリがいたと証言しています。にもかかわらず、「いかに暴力的な軍の圧力下とは言え、あんなにみごとに旗いろを変えて、諾々として一つの方向に就いてなぐれ出したという」とを不思議に思ったのでした。

42年4月、「第一回の敵の爆撃機がやってきた」と光晴は書いています。いわゆる武蔵野空襲は2年後のことになります。第一回の頃にはすでに「敗戦の気運」が濃くなっていたと光晴は記しています。44年12月、光晴、妻の森三千代、息子の森乾の3人は、空襲下の武蔵野を逃れ、山梨県南都留郡中野村（現・山中湖村）に一家で疎開します。その頃、光晴は、息子の召集令状のことで苦悩していました。「子供を応接室に閉じこめて、生松葉でいぶしたり、リュックサック一杯本をつめて夜中に駅まで駆け足させたり、はてはびしょびしょ雨のなかに、裸体で一時間立たせてみたり、あらゆる方法で、気管支喘息の発作を誘発させようと試みた」と記しています。今なお賛否の分かれる金子家の徴兵逃れの一端です。みなさんはどう思われるでしょうか？

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。